

博士論文要旨

論文題名：建物と人骨から見た縄文中期の人口と遊動性

立命館大学大学院文学研究科
行動文化情報学専攻博士課程後期課程

ノックソン コーリー タイラー

NOXON Corey Tyler

集団の人口変化を理解することで、集団の安定性、繁栄や衰退についての洞察を得ることができる。縄文時代の人口推計の研究は数多く行われており、関東・中部地方では縄文中期に人口の急増急減が確認されている。従来の人口推定方法は、主に遺跡数と住居数に依存しており、遺跡数と住居数の急増急減についての説明に、集団の定住性が変化した可能性を考慮していない。日本の土壌条件は、有機物の保存に適さない場合が多く、居住の季節性や定住性に関する有機物に依拠した分析は困難である。この研究では、多摩ニュータウンの発掘調査地域を事例として、竪穴住居と柱穴の掘方の形状という建物遺構から、縄文時代中期における居住の定住性の変化を明らかにすることを目的としている。これに加えて、これまでの人口推計によって指摘されてきた人口急増急減期を、関東と中部地方の人骨資料と比較する。

この研究の結果、柱穴の測定値においては、柱穴の直径以外に建物構造の変化を明確に示すものはないことを確認した。柱穴直径の測定値は人口急増急減に示唆を与えていると考えられるが、その変化を解釈するにはさらなる分析を必要とする。関東地方と中部地方の人骨資料は、遺跡数や住居数に基づく研究で見られる人口変化の傾向とある程度の相関を示しているが、人口変化の時期と増減の程度については、さらなる分析を必要とする。